北星学園大学社会福祉学部北星論集第50号（2013年３月）・抜刷

ティーンエイジャーの友達関係の日独比較

K.-Ulrike NENNSTIEL
中　田　知　生

ティーンエイジャーの友達関係の日独比較

K.-Ulrike NENNSTIEL
中　田　知　生

1．概要
2．「友達」と呼ぶ人
　2．1「友達」の人数
　2．2「友達」の特徴
3．「友達」の援助
4．「友達」に対するイライラ感
5．「友達」と「クリック」(グループ)
6．レジュメ
7．文献

1　概要

日本において若者が研究対象となるのは，多くの場合，「新しい社会問題」・「社会病理」，「事件」等の関係である。それ以外に勿論，学校教育の関係でも若者が学問の対象となることがある。しかし，彼ら・彼女ら自身が考えたり・感じたりすることに注目する研究は極めて少ない。それに対してドイツでは，若者について，少なくとも1960・70年代から，実証的であれ，理論的であれ，将来の社会の主体として多くの社会科学研究で論じられてきた。

「友達関係」について言えば，心理学者や犯罪学者が若者に注目することがあるが，日本の社会学の人間関係の研究においては，その殆どが家族，又は労使関係に集中していると言えよう。「友達関係」でもティーンエイジャーは社会学の研究対象となることが少ない。本研究はこの穴を埋めることを意図し，国際比較を通して視野を更に広げることに寄与したい。

本研究のデザイン及びドイツのサンプルについては別なところ（ネンシュティール・中田2012）で細かく説明したので，ここでは最少限を述べる。

ティーンエイジャーの「友達」という表現の意味，「友達」及びグループ（「クリック」）の日常的な機能・重要性を把握するために，ミックス・メソッドで調査を行う。具体的に言うと，日本とドイツの寮付き学校の生徒を対象に量的アンケート及び質的インタビューを行い，教員や寮の管理者に対してインタビュー調査を実行する。本論文では，そのアンケート調査の中から「友達」をめぐる質問群の結果を日独比較で紹介・分析する。

ティーンエイジャーの友達関係の研究においては，若者自身の「友達」という表現の定義が最も重要な問題である。そのために「友達」という表現の意味やそこに含まれている内容を可能な限り多様な観点から把握するという目的で，７つの質問と各々の質問に対する回答を設けた。各回答に対して五点のスケールで（「当てはまる」，「どちらかと言えば当てはまる」，「どちらかと言えば当てはまらない」，「全く当てはまらない」，「どちらでも言えない」）最も適切と思うところに丸をつけるという方式になっている。質問と回答選択肢は，先行研究で使用された（Bund der deutschen katholischen Jugend & Misereor

キーワード：友達，グループ，援助，距離

（編）；畠 山2003；川 原・山 崎1996；Shell Deutschland Holding 2010；柴橋2004）スケールを参考に，ドイツのチュービンゲン大学ソーシャル・ペダゴジック（社会教育学）の教授Rainer Treptowと一緒に作成し，プリテストによって検討し，Nennstielの翻訳は，北星学園大学で社会調査を専門にしている中田知生及び養護教育学の田実潔が再検討した。

サンプルは，この研究への協力を得られたEvangelisches Klosterseminar Maulbronn及び北星学園余市高等学校の，全生徒によるものである[1]。学校の規模と特徴によって生徒の人数と年齢は異なっているが，この違いが与える影響の方向は先行研究に基づいて充分に推測できる（Kreitz-Sandberg 2002, Toyama-Bialke 2000）。つまり，この二つのサンプルの特徴がどちらかと言えば，ドイツの場合，同年齢の平均よりも学習熱心，まじめ，勤勉な生徒が多いという傾向と，日本のサンプルは逆に，同年齢の平均よりも権威者に対して反発したり，個性が強く社会の支配的価値観を否定する傾向の人が多いという特徴がある。その結果，本研究のサンプルは文化の違いが，平均を代表するサンプルの場合よりも小さく見える。

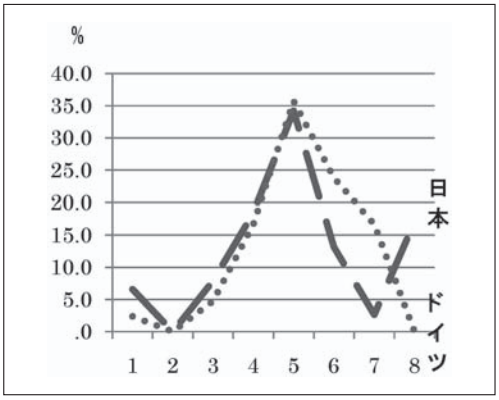
2.「友達」と呼ぶ人

調査対象となった生徒の「友達」の定義を把握するために，まず，二つの質問を用意した。一つは「友達」と呼ぶ人の人数について，もう一つは，「友達」と呼ぶ人の特徴・条件についてである。

2．1「友達」の人数（図1）

「貴方が『友達』と呼ぶ人は何人ぐらいいますか？」という質問に対して，1「誰もいない」，2「一 人」，3「2～3人」，4「4～7人」，5「8～14人」，6「15～25人」，7「26～40人」，8「40人以上」という発展の選択肢を用意した。ドイツ及び日本の生徒の回答は以下の表のカーブに表れている。

図1：「友達」数



1「誰もいない」，2「一 人」，3「2～3人」，4「4～7人」，5「8～14人」，6「15～25人」，7「26～40人」，8「40人以上」

ドイツと日本の生徒の回答を比較すると，何よりも，カーブ全体の類似性が目立つ。友達数においては文化的違いよりも高校年齢の若者の共通性が大きい。どちらのサンプルでも，「友達はいない」と恥ずかしくなく言う人がいても，「友達は一人だ」と言う人はいない。これは，回答者の年齢と深い関係があると思われる。つまり，「パートナー」と呼べる人がいても，「一人だけの友達」と言うのは，その友達が異性であれ，同性であれ，「パートナーではないが，特別な（曖昧な？）関係」を示す表現となるからだと思われる。又，別な観点から言うと友達が「一人しかいない」と言うのは，自分が魅力的ではない存在だということを意味する。それに対して，「誰もいない」と言うと自分が強くて一人で野原で暮らすオオカミのイメージを思い出させるので，寂しさが含まれる表現ではあるが，自分が「強くて，他人は要らない・人に頼りたくない」という意味合いが見られる。

友達数が10人前後だと回答した生徒がどちらのサンプルでも最も多い。日独の違いが見

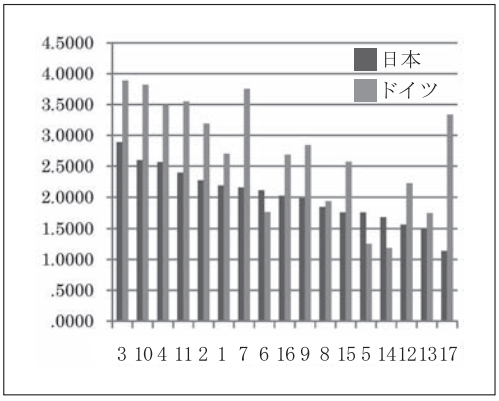
られるのは，カーブの右側である。ドイツのサンプルでは，友達数が多い場合30人前後がいるのに対して，日本のサンプルでは，「友達が多い」生徒は40人以上を自分の「友達」と見なしている。日本でもドイツでも特に若者の間で「友達が多い人は魅力的な人間だ」という考え方が支配的であるが，ドイツの場合，「40人以上」「友達」と呼ぶ人がいるなら，「この人が魅力的だ」というよりも，「この人は顔は広いが人間関係が浅い」という（より魅力的ではない）イメージとなる危険がある。また，日本では幼稚園・保育園の時から教育者が他の子供を皆「友達」と呼んでいる事実が友達数に上限が存在しないという考え方に影響を与えていることもあり得る。

２．２「友達」の特徴

次に，「『友達』（「友人」）関係とは，あなたにとって何を意味しますか？」と言う質問に対する回答を日独比較で見る。各々の表示線は，一つの要素に関する各サンプルの平均的な賛成度を示している（図２）。

全体的に目立つのは，殆んどの棒はドイツの場合より長いということである。これは西洋と日本と比較した文献によれば[2]西洋人が日本人より積極的に物事を言う傾向の表現と見なすことができる。友達関係の特徴について日本の生徒の回答でより積極的な賛成が表現されている様に見えるのは，５「同じ考え（意見）を持つ」，６「同じ関心・趣味を持つ」と14「嫌になることがない」という三つの項目のみである。しかし，ｔ－テストの結果によれば日独の差異が殆どの項目の場合有意の差であるのに，差が有意でない項目はちょうど日本で賛成度が比較的高く見える，友達の共通性を強調する項目５，６，８と，「必要な時にお金を貸してあげる」⒀である。

図２：「友達」という意味[3]



縦軸は，１～５スケールの賛成度を示している。
横軸の全項目は文末の脚注に載せてある。[4]

言い換えれば，ドイツの生徒にとって「友達関係」においては，「相手を信用できる」⑶，「互いに信頼できる（依存できる）」⑽，「どんな時でも互いに協力し合う」⑺，「どんなことについても話せる（相談できる）」⑾，「互いに正直にいる」⑷，「定期的に（よく）連絡がある」⑵，「多くの活動を一緒に行う」⑼，「定期的に（よく）会う」⑴，「多くの時間を一緒にすごす」⒃，「以心伝心」⒂，「互いに秘密を持っていない」⑿，という要素が，日本の生徒にとってより重要であるかの様に見えるが，上に述べた文化によって異なる答え方（つまり，日本人が「極端な数字」１と５を選ばないという傾向）がこの結果に影響を与えた可能性が否定できない。

取りあえず，上のグラフに基づいてはっきりと言えるのは，「嫌になることがない」ことは，日本の生徒にとってはドイツの生徒にとってよりも重要であり，友達関係では相手を一時的に嫌になったり，距離を置いたりするのは許しにくいということである。これも専門文献で指摘されている日本人が「ウエット」の人間関係を好むという見方と合致している。

表１：「友達」とは

『友達』(「友人」) 関係とは、あなたにとって何を意味しますか？	ドイツのサンプル			日本のサンプル		
	1	2	3	1	2	3
2.2.1　定期的に（よく）会う	.153	.171	.847	.399	.345	.913
2.2.2　定期的に（よく）連絡がある	.344	.120	.822	.404	.489	.856
2.2.3　相手を信用できる	.813	.355	.550	.368	.884	.439
2.2.4　互いに正直にいる	.828	.470	.199	.467	.899	.401
2.2.5　同じ考え（意見）を持つ	.334	.751	−.096	.874	.461	.470
2.2.6　同じ関心・趣味を持つ	.321	.710	.348	.799	.593	.498
2.2.7　どんな時でも互いに協力し合う	.834	.472	.280	.773	.728	.560
2.2.8　同じユーモアを持つ	.161	.760	.106	.844	.508	.315
2.2.9　多くの活動を一緒に行う	.540	.594	.394	.640	.600	.710
2.2.10　互いに信頼できる（依存できる）	.783	.236	.206	.442	.892	.433
2.2.11　どんなことについても相談できる	.754	.239	.155	.598	.797	.320
2.2.12　互いに秘密を持っていない	.672	.348	−.214	.874	.367	.466
2.2.13　必要な時にお金を貸してあげる	.244	.313	−.344	.559	.265	.657
2.2.14　嫌になることがない	.226	.570	−.178	.717	.271	.480
2.2.15　以心伝心	.567	.687	.271	.745	.423	.394
2.2.16　多くの時間を一緒にすごす	.380	.559	.536	.551	.459	.745

両国の共通の傾向として若者が友達関係において最も重要に思うのは，互いの信頼（3，10）であり，続いて，相談・協力と定期的コンタクトとなっている。しかし，経済的に困った時に助け合うのは友達の役割と考えられていない傾向も，両サンプルの共通の要素として見られた。

質問票で扱った回答要素数が多く，要素の一部の間では類似性も大きいので，全体像を把握するためにドイツのサンプルと日本のサンプルの因子分析を行い，その結果を表１で比較可能な形にした（表１）。

ドイツのサンプルの因子分析によって第１因子で「**信頼**」を中心と考えるグループと，第２因子でメンバーの「**類似性**」を中心としているグループと，第３因子「**日常的な接触**」に基づくグループとを区別（ネンシュティール・中田2012：61・２を参照）できたが，日本のサンプルの因子分析の結果，因子の順序と具体的な要素は異なりながらも，ドイツの場合と全く同じ類型が見られる。言い換えれば，ティーンエイジャーの友達関係は日本とドイツの場合，原則的に同じ三種類の根拠に基づいていると言える。

次に，友達からの援助を期待できる機会について見ておこう。

3.「友達」の援助

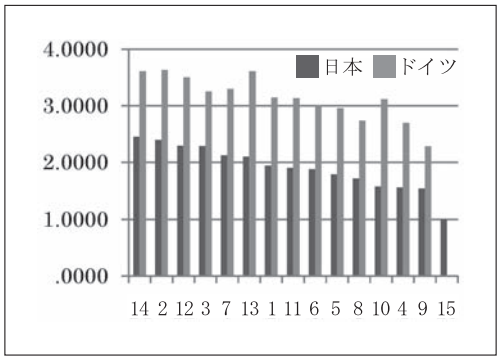
友達からどんな程度及びどんな内容の援助を得られるかという問題が近年，特に高齢化社会の介護困難との関連で注目されることが多くなっているが，ティーンエイジャーの年齢では友達の援助は，（少なくとも長期的に見た場合）相互的である可能性が高く，介護者・被介護者の関係の場合と異なって，一方的な依存関係を生みだすことがあっても，一般的ではない。

まず，若者がどういう時に友達から援助を期待するかを日独比較で見る。（図３）

ここで，図２の場合よりも更に目立つのは，日本とドイツの棒の長さの違いであるが，上の場合と同じく，文化が回答の仕方に影響を与えた可能性が充分にあり得る。表で日独の

差異が特に大きく見えるのは，「何らかの援助が必要なとき」⒀及び「禁じられていることをしたとき」⑽の項目についてだが，実際に全ての項目については両方のサンプルの間の差が有意である。

図３：友達の援助



縦軸は，１～５スケールの賛成度を示している。
横軸の全項目は文末の脚注に載せてある。[5]

この質問に対する回答の因子分析は表２に表れている（表２）。

因子分析によって，ドイツの場合「病気の時」，「学校でのトラブル」，「お金の問題」，「失敗した時」等の要因を多かれ少なかれ自分の責任で起きた「**外的問題**」とまとめられる。それと対照的に第２因子のグループの要因（「悲しい時」，「寂しい時」等）は「**内的問題**」，「**落ち込む**」傾向を示している。第３のグループは「恥ずかしくて・嫌な時に」と言えよう。

日本のサンプルの回答の因子分析は，第１因子のグループは「**内的問題**」，第２因子のグループは「**外的問題**」と名づけられるが，ドイツの場合と違って，「内的問題」に学校の（人間関係の）トラブルが含まれており，「外的問題」には親とのトラブルが含まれる。第３因子のグループは，自分が「してはいけないことをした」という要素が付け加えられて，「**学校の**あり得る**トラブル**」と言える。二つのサンプルで明らかに異なるのは，親の位置づけと学校の位置づけである。親とのトラブルは，何れの場合にも「恥ずかしい出来事」と一緒になっているが，日本の場合，病気，お金の問題やルールの違反行為と合わせて一つの因子となっている。又，学校の人や出来事が日本のサンプルに与えている影響が

表２：友達の援助

構造行列

どういう時に友達が援助してくれるか？	ドイツ			日本		
	1	2	3	1	2	3
2.3.1 病気のとき	.750	.232	−.176	.627	.774	.558
2.3.2 悲しいとき	.479	.736	.279	.892	.503	.455
2.3.3 学校で問題があるとき	.700	.260	.390	.766	.372	.615
2.3.4 宿題をやっていない時	.683	.170	.257	.282	.529	.793
2.3.5 恥ずかしいことがおきたとき	.674	.251	.727	.588	.685	.778
2.3.6 先生と問題のあるとき	.831	.220	.348	.700	.549	.855
2.3.7 クラスメートと問題があるとき	.322	.405	.268	.759	.501	.736
2.3.8 親と問題があるとき	.255	.135	.888	.549	.802	.537
2.3.9 お金の問題があるとき	.669	.210	.310	.490	.864	.564
2.3.10 禁じられていることをしたとき	.712	.056	.468	.518	.790	.635
2.3.11 どこかに逃げたいとき	.358	.231	.784	.554	.588	.731
2.3.12 淋しいとき	.151	.882	.200	.810	.591	.562
2.3.13 何らかの援助が必要なとき	.278	.932	.257	.801	.742	.448
2.3.14 相談が必要な時	.092	.820	−.064	.898	.611	.390

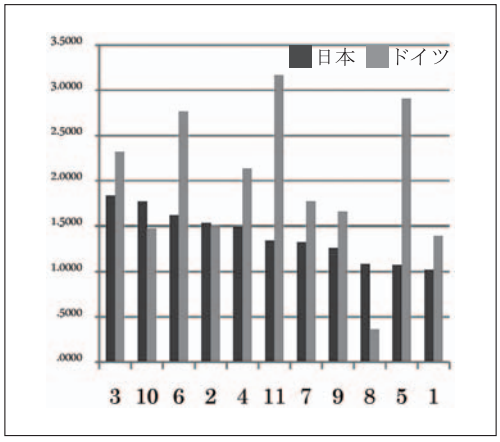
因子抽出法： 主成分分析
回転法： Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

ドイツの場合より大きいという分析結果が先行研究によっても支持されている(Kreitz-Sandberg2002，Toyama-Bialke 2000)。

4.「友達」に対するイライラ感

特に寮付き学校の様に毎日，そして多くの場合更に夜を一緒に過ごすことの多い生活環境・条件に置かれていれば，どんなに「良い」友達であってもイライラを感じさせることもあるのは，当たり前と思う人が多い。他方，イライラを感じるならばこの友達関係はそれほど親しくないことにその原因がある，又は，自己中心的な人は友達関係がうまくいく見込みがない等の説もある。寮付き学校で同級生と一緒に暮らしている日本とドイツの生徒の回答はこの質問の場合，他の質問の場合よりも大きく異なる。まず，二つのサンプルの平均値がほぼ同様である点もあれば，サンプルによって，多く表れる反応と殆ど表れない反応も存在する（図４）。

図４：友達に腹が立つ時にどうしますか？



縦軸は，１～５スケールの賛成度を示している。
横軸の全項目は文末の脚注に載せてある。[6]

日本の生徒の場合，すべての項目に対する反応があまり大きく異ならないので，彼ら・彼女らにとって，友達に対してイライラを感じるのは，問題としてあまり存在しないと思われる。又，上述したケースが生じた時，まず，相手に対して距離を置くことに注意を払う傾向が強い。別な人に連絡したり，自分なりに（一人で）別な活動に集中したりする努力がより弱い。その点，ドイツ人の反応は明らかに異なる。ｔ-テストが有意な差を示すのは，項目４（「スポーツする」），５（「楽器を弾く」），６（「引っ込む」），８（「泊まりに出かける」）と11（「その他」），の回答である。「楽器を弾く」という反応がドイツのサンプルの場合多いのは，その学校の特徴に原因があると思われる。

にもかかわらず，ドイツのサンプルでは，自分の考え・注目を友達関係から違う対象に変えようという努力が見られる。日本でドイツよりも賛成度の高いただ一つの項目は，「泊まりに出かける」という項目であり，ドイツの人の「楽器を弾く」等と同じ目的の行動であると考えられる。だが，この結果の分析・解釈に充分な根拠を与えるために，両方のサンプルの回答の因子分析を行い，その結果を比較する（表３）。

ドイツのサンプルの場合，第１因子群は，自分が感じることを明らかに他人に知らせない，「**本音を隠す**」という意図の行動パターンであると言えるだろう。第２因子群は，あまり目立たない形で「**距離を置く**」ことを表すものである。第３因子群は，「自分の考え・注目を脇へ逸らす」努力と見なすことができる。

日本のサンプルの第１因子群は，ドイツの最後のグループと比べて項目が多いが，内容的に対応するものである。日本の第２因子群は，自分が引っ込んだり，イライラ感じる事実を隠したりする行動であるという意味で，ドイツの第１因子群と第２因子群の合わせに近いと言えよう。第３因子群は，はっきりと距離を置いたり，相手を受け入れたくない，「**否定する**」ことを表したりするようなので，

表３：友達に腹が立つ時の反応

友達に対してイライラした時にどうしますか？	ドイツ			日本		
	1	2	3	1	2	3
2.6.1 勉強に集中する	.611	.174	.386	.734	.609	.115
2.6.2 （その友達に）時間がないと言う	.039	.083	-.391	.324	.176	.844
2.6.3 （その友達に）一人でいたいと言う	-.014	.782	-.235	.251	.339	.861
2.6.4 スポーツする	.099	-.147	.755	.722	.311	.217
2.6.5 楽器を弾く	-.068	.219	.695	.702	.625	.063
2.6.6 引っ込む	.101	.767	.172	.298	.693	.443
2.6.7 学校外の友達と連絡とる	.457	-.264	-.103	.795	.325	.408
2.6.8 泊まりに出かける	.733	-.103	.151	.823	.451	.209
2.6.9 親と相談する	.617	.150	-.286	.584	.824	.166
2.6.10 誰にも分からない様に努力する	.625	.463	-.114	.346	.756	.138

因子抽出法：主成分分析　　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

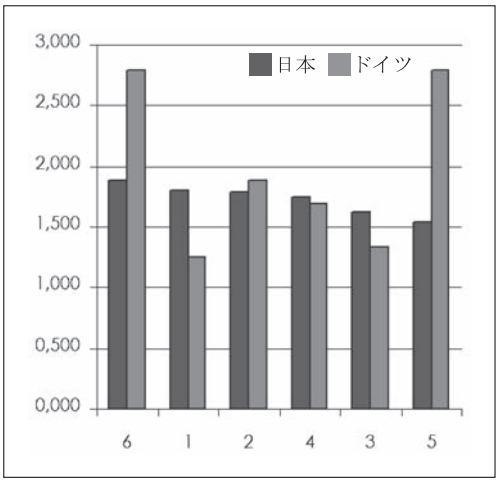
その後，友達関係の継続をかなり難しくすると思われる。本人が表面上冷静に話しながら実際に最も軽率・感情的に反応すると言えるのではないだろうか？

５．「友達」と「クリック」(「グループ」)

最後に，自分が友達と一緒にいる時に一種のグループ（「クリック」）感が存在するか否かを見ておこう。「クリック」に属するのは，ドイツの若者にとって殆ど「当たり前」である（Wetzstein et al 2005：149-197）が，若者の生活が学校・クラブ・塾などによって制度化されている度合いの高い日本においては，自発的なクリックが存在するにしても，その殆どが制度化され，大人にコントロールされている日常生活の枠内で，多かれ少なかれ大人の影響を受けながら発生・維持されている。その枠外の自発的なクリックは，数も役割も極めて小さいと推測できる。

だが，今回調査対象となった寮付き学校の場合，具体的な学校の特徴の影響でドイツのサンプルの生徒が日本のサンプルの生徒よりも自由時間が少ないと考えられる。その結果，このサンプルのドイツの生徒がクリックを重視するならば，他のドイツの生徒は更にそうだと推測できる。

図５：友達と一緒に一つの「グループ」？



縦軸は，１～５スケールの賛成度を示している。
横軸の全項目は文末の脚注に載せてある。[7]

まず，「クリック」（ここでは「グループ」といっているが[8]）に関する命題への賛成度を日独比較で見ておこう。（図５）

日本のサンプルでは全ての項目に関する賛成度はほぼ同じであるのに対して，ドイツのサンプルでは，特に６（「（我々）友達同士のグループであり，何か一緒にすることがとても多く，互いの関係性を感じている。」）及び

5（「友達同士でグループを形成しているが，「メンバー」とは言い難い人が一緒になることも多い。」）という項目に対する賛成が目立って強く，逆に，1（「友達同士で親しい人もいるが，グループ皆で何かすることはめったにない。」）という項目に対する賛成が極めて低い。日独の平均の差は，ちょうどこの三つの項目について見られる。ドイツの生徒の間では一種のグループ（「クリック」）に属する生徒が多いが，日本のサンプルの生徒の間には類似した感覚は見られない。

同じ質問回答の因子分析の結果が表4に表れている。

因子分析によってドイツの場合第1因子として曖昧な境界線のクループが描かれており，本人とその友達の属性も微妙であることがうかがえる。第2因子で表れているのは，外部に対してオープンだが，メンバーとそうではない人をはっきりと区別しているグループの存在である。第3因子では友達同士のグループの存在が否定されている。

日本の場合，第1因子がドイツの第1因子と似ているが，境界線が更に曖昧な感じの「グループ」というより「集まり」のことである。第2因子は自分が属しないグループの存在を推測させており，第3因子は完璧なグループメンバーの表現である。

両方のサンプルを比較してみると，どちらの場合でも第1因子が自分の属性も他のメンバーも比較的曖昧なグループのイメージであり，第2因子は柔軟な，ドイツでは本人が属する，日本では本人が属しないグループを示している。第3因子は，日本とドイツのサンプルで対照的な結果を表している。

表4：　友達＝「クリック」？

友達同士のグループがありますか？	ドイツ			日本		
	1	2	3	1	2	3
2.7.1　友達同士で親しい人もいるが，グループ皆で何かすることはめったにない。	.136	-.112	.954	.400	.965	.097
2.7.2　グループで何かすることがあるが，そのたびにメンバーが異なる。	.490	-.436	.431	.786	.235	.475
2.7.3　友達同士のグループに属していて何か一緒にすることもあるが，最も親しい友達はこのグループに属しない。	.770	-.116	.005	.915	.411	.256
2.7.4　友達同士のグループが存在するが，私はたまにしか一緒になることはない。	.871	-.045	.257	.768	.660	.308
2.7.5　友達同士でグループを形成しているが，「メンバー」とは言い難い人が一緒になることも多い。	.193	.814	-.104	.841	.407	.156
2.7.6（我々）友達同士のグループであり，何か一緒にすることがとっても多く，互いの関係性を感じている。	-.417	.841	-.111	.313	.117	.984

6．レジュメ

本論文を通して，寮付き学校の生徒のアンケート調査のデータに基づいて，若者の友達関係を日独比較で検討した。

全体的に言えるのは，日本とドイツの高校生の友達観が予想以上に似ているということである。だが，この結果に両方のサンプルの特徴が影響を与えた可能性は否定できない。

友達の数と定義に関しては，類似性が特に大きい。40人以上の「友達」を持つ人に対するイメージのみ明らかに異なっている。

友達から援助が期待できる機会もかなり類似しているが，特に親とのトラブルと学校の位置づけには，明らかな違いもある。学校が日本の生徒にはドイツの生徒よりも気になる

ことは間違いないであろう。

友達に対してイライラを感じる時の反応にも類似性と同時に違いをも見られる。つまり，自分の注目対象を脇へ逸らしたり，相手と距離を置き自分を引っ込めたりするのは，どちらのサンプルでもみられた。だが，相手を受け入れたくないことをはっきりと表すことによって将来の友達関係の維持を非常に難しくする態度は日本のサンプルのみに明らかにされた。

友達同士のグループ意識・感覚については，他のところと同じく日独の類似性が把握できたが，日本の場合「グループ感」が存在すれば，そのグループがより閉鎖的になる可能性が高いと推測できるが，しかしはっきりこういった結論を導くには更に別なデータが必要である。

しかし今回のデータとその分析に基づいて充分に言えるのは，ティーンエイジャーの友達関係には，文化の違いより類似性が大きくて，生活条件，年齢などによる差が文化による差をかなり超える可能性が高いということである。

従ってこれからは，ティーンエイジャーの友達関係に影響を与え得る要因を更に詳細に調べると同時に，他方，友達関係で悩んでいる若者への援助を海外のことを参考にしながら進めていくことが有効となるだろう。

以上は，2012年度北星学園大学特別研究費による研究である。

7．文献

Bund der deutschen katholischen Jugend & Misereor（編），2007，Wie ticken Jugendliche? Sinus-Milieustudie U27．Heidelberg：Sinus：Sociovision．

Harring, Marius et al, 2010, Peers als Bildungs- und Sozialisationsinstanzen- eine Einführung in die Thematik;in:Harring, Marius et al., Freundschaften, Cliquen und Jugendkulturen. Peers als Bildungs- und Sozialisationsinstanzen. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 9-19.

畠山寛，2003，青年期の友達関係のルールに関する研究。鳥取短期大学研究紀要　第48号，49-57．

本田由紀，2011，若者の気分。学校の「空気」。東京：岩波書店。

川原誠司・山崎美香子，1996，中学生における友人関係の特徴と意義。東京大学大学院教育学研究科紀要　第36巻，301-324．

Kreitz-Sandberg, Susanne, 2002, “Andere Welten?”: Soziale Integration von Jugendlichen in Japan und Deutschland im Vergleich; in: Kreitz-Sandberg, Susanne（編），Jugendliche in Japan und Deutschland: soziale Integration im Vergleich. Opladen: Leske und Budrich, 1-49.

Nennstiel, K.-U./ Nakata, T., 2012, ティーンエイジャーにとって「友達」とは。ドイツの寮付き学校の調査から。北星学園大学社会福祉学部北星論集　第49号，55-68.

Rohlfs, Carsten, 2010,Freundschaft und Zugehörigkeit - Grundbedürfnis, Entwicklungs aufgabe und Herausforderung für die Schulpädagogik; in: Harring, Marius et al., Freundschaften, Cliquen und Jugendkulturen. Peers als Bildungs- und Sozialisationsinstanzen. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 61-71.

Scherr, Albert, 2010, Cliquen/ informelle Gruppen: Strukturmerkmale, Funktionen und Potentiale; in: Harring, Marius et al., Freundschaften, Cliquen und Jugendkulturen. Peers als Bildungs- und Sozialisationsinstanzen. Wisbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 73-90.

Shell Deutschland Holding， 2010，16．Shell Jugendstudie．Jugend 2010，Frankfurt am Main：Fischer Taschenbuch Verlag．

柴橋祐子，2004，青年期の自己表明に関する研究。中学・高校生の友人関係を対象として。

東京：風間書房。
Toyama-Bialke, Chisaki, 2000, Jugendliche Sozialisation und familiäre Einflüsse in Deutschland und Japan. Köln et al: Böhlau Verlag.
Wetzstein, Thomas et al, 2005, Jugendliche Cliquen. Zur Bedeutung der Cliquen und ihrer Herkunfts- und Freizeitwelten. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

---

[1] ドイツの場合，ギムナジウム制度の改革の関係で，一番上の学年の生徒は寮付き学校の外部の学校の授業を受けることが多いので，アンケートに参加できなかった生徒もいる。

[2] 森田昭雄と石原新太郎が書いた『「NO」と言える日本』，1989,までいかなくとも，いわゆる日本人論に属する文献の多くには，それなりの内容が書かれている。

[4] 1「定期的に合う」，2「定期的に連絡がある」，3「相手を信頼できる」，4「互いに正直である」，5「同じ考え（意見）を持つ」，6「同じ関心・趣味を持つ」，7「どんな時でも互いに協力し合う」，8「同じユーモアを持つ」，9「多くの活動を一緒に行う」，10「互いに頼れる」，11「どんなことについても話せる（相談できる）」，12「互いに秘密を持っていない」，13「必要な時に（一月分の小遣いぐらいの額の）お金を貸したり借りたりできる」，14「嫌になることが全くない」，15「話さなくても心が通じる」，16「多くの時間を一緒に過ごす」。

[5] 1「病気の時」，2「悲しい時」，3「学校で問題がある時」，4「宿題をやっていない時」，5「恥ずかしいことがおきた時」，6「先生と問題のある時」，7「クラスメートと問題がある時」，8「親と問題がある時」，9「お金の問題がある時」，10「禁じられていることをした時」，11「どこかに逃げたい時」，12「淋しい時」，13「何らかの援助が必要な時」，14「相談が必要な時」。

[6] 1「勉強に集中する」，2「（その友達に）時間がないと言う」，3「（その友達に）一人でいたいと言う」，4「スポーツする」，5「楽器を弾く」，6「引きこもる」，7「学校外の友達と連絡とる」，8「（できるだけ早く）泊まりに出かける」，9「親と相談する」，10「誰にも分からない様に努力する」。

[7] 1「友達同士で親しい人もいるが，グループ皆で何かすることはめったにない」，2「グループで何かすることがあるが，そのたびにメンバーが異なる」，3「友達同士のグループに属していて何か一緒にすることもあるが，最も親しい友達はこのグループに属しない」，4「友達同士のグループが存在するが，私はたまにしか一緒になることはない」，5「友達同士でグループを形成しているが，『メンバー』とは言い難い人が一緒になることも多い」，6「（我々）友達同士のグループであり，何か一緒にすることがとっても多く，互いの関係性を感じている」。

[8] 「クリック」に関するイメージは曖昧で，特に日本とドイツの若者の間で意味付けの差が大きい可能性を考慮して，「クリック」という表現を使わず今回論じる質問においては「グループ」という言葉にした。

[Abstract]

Japanisch-deutscher Vergleich der Freundschaftsbeziehungen unter Teenagern

K.-Ulrike NENNSTIEL
Tomoo NAKATA

Während Jugendliche in der sozialpädagogischen Forschung und Sozialarbeit in Deutschland einen zentralen Platz einnehmen, stehen sie in der japanischen Sozialpädagogik und Sozialarbeit eher am Rande. Zwar widmen sich viele psychologische Studien der Entwicklung Jugendlicher, besonders unter Aspekten der Identitätsausbildung, doch konzentrieren sie sich meist auf quantitative Erhebungen und verfolgen eher deskriptive Ziele. Demgegenüber nutzt die vorliegende Studie mixed methods und möchte anhand eines trans kulturellen Vergleichs den Blick öffnen für alternative Denk- und Verhaltensmöglichkeiten und andere Wertemuster als die vertrauten. Sie möchte dazu dienen, neue Hilfsangebote zu entwickeln für Jugendliche, die in- und außerhalb von Freundschaftsbeziehungen sozialer Unterstützung bedürfen.

Der vorliegende Beitrag präsentiert als Teilergebnis des umfangreichen Projektes, was japanische und deutsche Jugendliche der quantitativen Erhebung zufolge unter "Freundschaft" verstehen. Dabei zeigt sich, dass die Gemeinsamkeiten in allen berücksichtigten Aspekten überwiegen. Unterschiede treten besonders in Bezug auf Privatheit und Abgrenzung sowie in Bezug auf die Wahrnehmung einer Gruppe von Freunden als "Clique" zutage.

Key words：Youth, Friendship, Intercultural, Comparison, Germany, Japan